

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19820050
 研究課題名（和文） 言語、文体面から見たジェイムズ・ジョイス文学の「発展」に関する研究
 研究課題名（英文） James Joyce's Literary "Development" Reconsidered : A Verbal Scrutiny of His Works
 研究代表者
 合田 典世 (GODA MICHIO)
 広島経済大学・経済学部・講師
 研究者番号：90454868

研究成果の概要：

ジェイムズ・ジョイスの主要 4 作品の軌跡を、従来のように、伝統的な小説作法から革新的実験への、時系列に沿った「発展」として捉えるのではなく、4 作品が、解釈可能性において、相互に影響を与え合う、いわば共時的なダイナミズムを形成することを、それぞれの作品、とりわけジョイス文学の転換点とされる『ユリシーズ』に、言語、文体面からの分析を施すことにより、例証した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総 計	2,000,000	300,000	2,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：ジェイムズ・ジョイス、アイルランド文学、文体論

1. 研究開始当初の背景

ジョイス研究は「ジョイス産業」と言われるほどに、アカデミズムにおいて肥大化しており、研究書、論文の数は、他の作家とは一線を画す。しかしながら、もはや手つかずの分野はないと思われるほどに飽和した、ジョイス学界においては、いわゆる「文学理論」を駆使した研究が大勢を占めており、ジョイス作品の細部の重要性がとかく看過される傾向がある。文学理論や批評用語が、その妥当性の十分な検討を経ることなく、鵜呑みにされ、作品の実体が却って不明瞭なままにされてきたという実態がある。

2. 研究の目的

『ダブリナーズ』(1914) から『若き芸術家の肖像』(1916)、『ユリシーズ』(1922)、そして『フィネガンズ・ウェイク』(1939)へと至る、ジェイムズ・ジョイスの主要 4 作品の軌跡を捉えるのに、ジョイス研究においてしばしば用いられる「発展」という概念に対して、ジョイスの小説言語、文体という観点から、検討、見直しを図ることを目的とする。文学理論のたたき台として作品を使うのではなく、あくまで作品自体を精読し、ジョイスの小説言語の特徴を明らかにすることで、これまでの細部の解釈の誤謬の訂正をは

じめ、無批判に使われる批評用語の妥当性に改めて疑問を投げかけ、ジョイス文学に新たな光を当てることを目指す。

3. 研究の方法

(1) ジョイス文学の転換点とされる『ユリシイズ』の文体分析により、当作品のジョイス文学の軌跡における位置づけを再考する。まず、『ユリシイズ』の、全18挿話にそれぞれに異なる文体が採用されていることに関して、詳細な考察を行う。文体の変化の問題は、これまで、少なからぬ批評家の関心を惹いてきており、様々な意味づけの試みがなされてきた。しかし、実際に作品を精読し、ジョイスの言語、文体の特徴を洗い出せば、これまでの意味づけの仕方を無条件に鵜呑みに出来ないことに気づく。批評におけるクリーシェに惑わされず、テキストの真の姿を見極めることが急務である。

この研究段階において鍵となるのが、ジョイスのテキストの重要な特徴の一つである、「クロス・レファレンシャル・ダイナミズム」(“cross-referential dynamism”)である。作品の精読によって、言語的パターンやモチーフ、語同士がエコーしながらテキスト上に形成するネットワークを拾い上げ、これらの発見が作品の読みをどう変えるのか、小説の「内容」とどういう関係を形成するのか、という問題について十分な考察を行う。これにより、互いに一見共通するところのないコンテキストに、同一の単語やフレーズがはめ込まれた現象の背後にある、ジョイスの意図、あるいは意図を超えた芸術的効果を探ることが可能となる。

さらに、もう一つの看過できないジョイスの小説言語の特徴として、かけ離れた性質の文体を採用しているとされる挿話間で、実は非常に似通った特徴を示す現象がある。この側面に関して、テキスト中の具体例を豊富に集めることで、説得的に提示できる形にする必要がある。実験色の比較的薄い文体とされる前半の挿話において既に、標準的文法、語法、語順を逸脱した、ジョイス的「技巧的悪文」の萌芽が既に見られること、あるいは、「科学的文体」の標榜する正確さ、精密さの裏で、語法の誤用や言語使用域の混用が見られること、などを詳らかにし、ジョイス的「悪文」の問題にメスを入れる。

(2) (1) に述べた研究段階において明らかにされた『ユリシイズ』の言語、文体特徴を、他作品のそれと比較照合をすることで、言語的パターンの相違・類似が、作品間で解釈可能性において相互に影響しあう可能性を模索する。

このためにまず、『ユリシイズ』におけるジョイスの小説言語の特性、とりわけ「技巧的悪文」とでも言うべき側面が、『ユリシイズ』に比して技巧的に未発展と見なされがちである初期作品の『ダブリナーズ』や『若い芸術家の肖像』から、既に始まっていることを立証する。その作業において特に要となるのが、『ユリシイズ』における重要な現象である「クロス・レファレンシャル・ダイナミズム」の観点から実証できるものかどうか、上記の初期2作品を検証することである。

まず、『ダブリナーズ』は、短編集という体裁をとり、15編それぞれが異なる語り手によって語られる。そしてその文体は、登場人物の口癖や、思考形式を反映した「自由間接文体」と言われるもので、ジョイス研究では、ヒュー・ケナーの案出した用語「チャールズ叔父さんの原理」と呼ばれてきた。しかし、「短編集」とはいえ、全15編の配列に「少年期」「青春期」「成熟期」「社会生活」という「相」を設定して、全編を通して一作品としての統一性を与えようとしたジョイスの意図からは、同じく異なる文体の18挿話からなる『ユリシイズ』との類似性や、作品間の相互影響関係の可能性が感じられる。これを実証するために、『ユリシイズ』で観察された言語特徴が、『ダブリナーズ』でも同様に観察できるのかを検証する必要がある。

次作の『若い芸術家の肖像』では、語り手の反映する意識は、主人公のステイブンのみとされるが、ステイブンの幼児期から青年期への成長を反映するため、セクションごとに文体は大きく変化する。ところがやはり、セクションを超えて頻出するモチーフや、その変奏、繰り返しなどの言語的パターンが顕著に観察される。この現象が、果たしてステイブンという一人の人格が一貫して背景に設定されていることによるものなのか、あるいは、『ユリシイズ』と同様、登場人物の意識を超えた、作者の言語操作によるものなのか、他作品との詳細な比較検討の上で、見極める必要がある。これによって、初期2作品における、登場人物の意識を超えた領域に属する、ジョイスのテキスト操作の可能性を示すことができる。

さらに、ジョイス文学の最終到達点である『フィネガンズ・ウェイク』の精読により、ジョイスの小説言語の最もラディカルな側面を洗い出し、この側面を考慮に入れての他作品読み直し、検討作業も併せて行う。

4. 研究成果

(1) 『ユリシイズ』の文体の問題を主軸とした研究段階においては、その成果を以て、他の主要作品との言語、文体面から見た連関性を探る研究段階への確固たる布石とするこ

とを課題とした。ジョイスの言語、文体が、『ユリシーズ』のテキスト上に具体的にどのように現れているのか探るべく、テキストの精読を研究作業の基礎とし、その言語現象が作品世界と形成する有機的な関連について詳細な考察を行った。ジョイスのテキストの重要な特徴である「クロス・レファレンシャル・ダイナミズム」を念頭に、“line”や“air”などといった一見単純な語から広がっていくテキスト上のウェブを丹念に追うことで、大変興味深い発見があった。こうした細部にまつわる発見から導かれる洞察を、2007年度に、2つの国内学会において発表することで、多くの有益なフィードバックを得ることが出来、次なる研究段階への基盤が整った。

また、国内学会での発表だけでなく、海外での資料収集作業からの収穫も大きいものがあつた。米フィラデルフィアのローゼンバッハ図書館に出向き、『ユリシーズ』の重要な手書き草稿の精査を行い、作品テキストのみからは知覚しえない、作者の癖の強い細かい書き込みから、作者が作品に仕組んだ意図を探ることができた。

以上の研究成果において特筆すべきは、近年の研究においてとかく看過されやすい細部の言語モチーフを漏らさず拾い上げることで、細部において新たな読みが提供できるのみならず、作品全体にも新たな光を当てることができることである。それにより、誰もが認めるところでありながら、どこか漠然としたままである、「ジョイス言語の革新性」という問題に関して、あくまでテキスト精読に基づいた、具体的かつ説得的な証拠を提供し、批評的クリーシェから脱する必要性を現今の学界に迫る、という意義が期待される。

(2) 『ユリシーズ』の文体の問題に関する研究成果については、国内学会のみならず、海外学会においても、口頭発表する機会が得られた。世界的ジョイス研究機関の中核の一つである、「チューリヒ・ジェイムズ・ジョイス・ファウンデーション」の国際ワークショップで、ジョイス/『ユリシーズ』の“curvilinearity”（曲線性）に関して口頭発表を行い、世界の著名なジョイス学者らから貴重なフィードバックを得られた。さらに、当成果を、2008年度に、2つの国内学会誌に論文として発表し、国内の学者ともさらに議論を交えることができた。

以上のように、『ユリシーズ』の言語・文体の詳察から導かれた研究成果を国内外に発表することにより、ジョイス研究における精読作業の重要性と作品の見落とされがちな細部の妙を洗い出す必要性を、提示することができた。

(3) 以上の国内外からのフィードバックをもとに、さらなる発展段階として、件の研究

成果をジョイスの他の主要作品（『ダブリナーズ』『若き芸術家の肖像』『フィネガンズ・ウェイク』）の言語、文体特徴と照合し、改めて『ユリシーズ』のジョイス文学における位置づけを検討し、ジョイス文学の軌跡を言語、文体面から捉えなおすという、本研究計画においての総仕上げを遂行できた。この研究段階においては、ジョイス文学全体に通底し、『ユリシーズ』において結節点を形成する特徴を示すキーワードとして、“unsatisfactory equation”というテキスト中に登場するフレーズに着目した。ジョイス的「不均衡」は様々なレベルで観察されるが、とりわけ、印刷された言葉とそれが指し示す対象との関係、フィクションと歴史との関係、記憶と事実との関係、時の不可逆性と過去の回想行為との関係において、端的に現れると言える。さらには、このキーワードが示す現象は、現在のジョイス研究を二分する、文字パズルとしての読み方とリアリズムの論理での読み方との対立関係の淵源としても捉えられる。

見落とされがちな細部から、作品全体、ジョイス文学の軌跡、ジョイス学界の流れまで、ミクロからマクロへ、マクロからミクロへと柔軟自在に動く視点を提供する本研究は、批評的クリーシェから脱するための一助としての意義を持つと期待される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 合田典世、『ユリシーズ』における“air”の詩学、『文体論研究』第55号、p.31-p.40、2009、査読有

② 合田典世、Curvilinear *Ulysses*、『エーデル』第28号、p.64-p.77、2008、査読有

〔学会発表〕（計 3 件）

① 合田典世、Curvilinear Joyce / *Ulysses*, Zurich James Joyce Foundation International Workshop、2008年8月8日、Zurich James Joyce Foundation

② 合田典世、『ユリシーズ』における“air”の詩学、関西アイルランド研究会、2007年9月23日、大阪経済大学

③ 合田典世、Curvilinear *Ulysses*、日本ジェイムズ・ジョイス協会、2007年6月16日、青山学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

合田 典世 (GODA MICHIO)

広島経済大学・経済学部・講師

研究者番号：90454868

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし